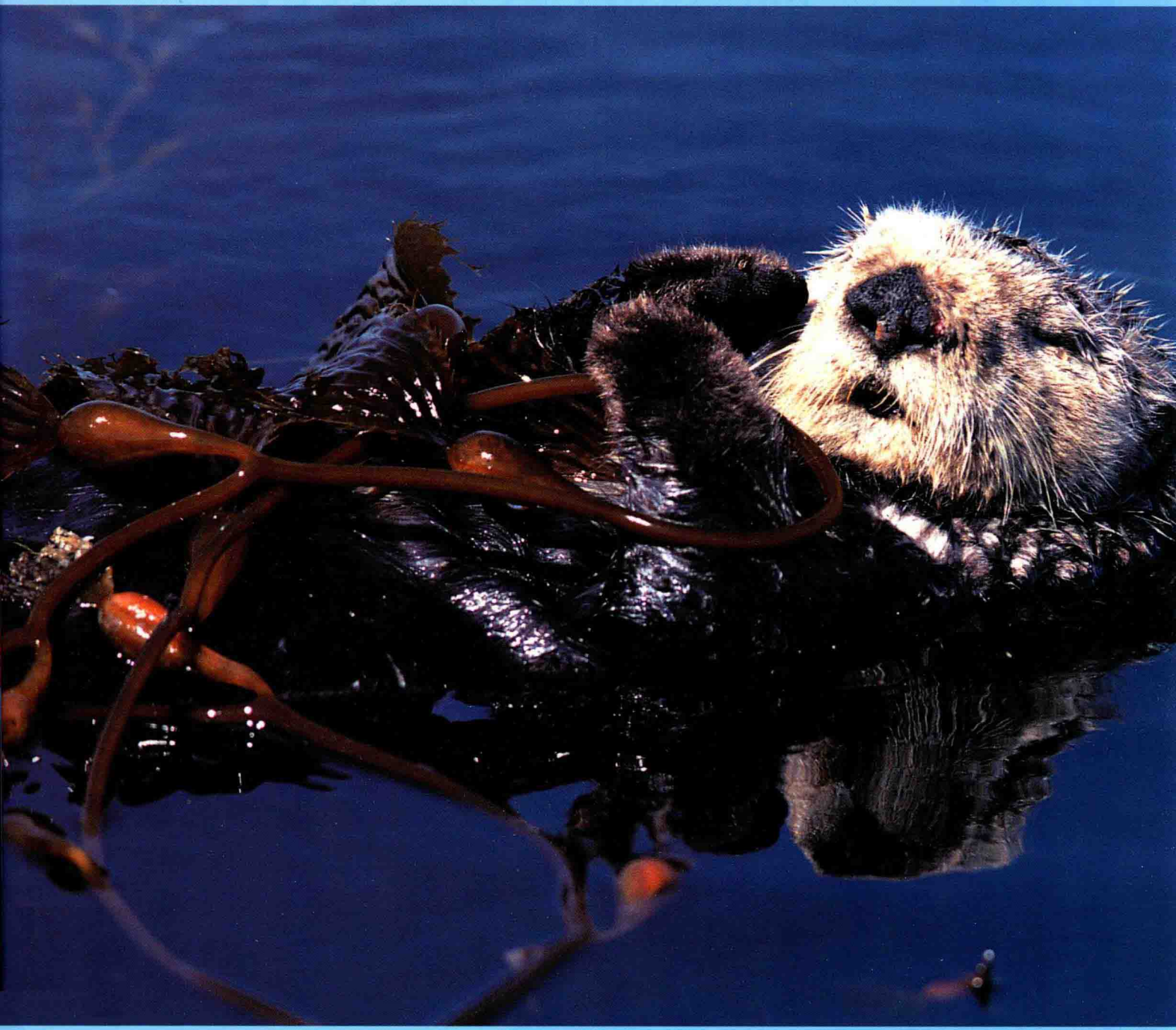
Endangered Animals

絶滅危惧動物百科 10

[(財)自然環境研究センター 監訳]

マウンテンニアラ―ワタリアホウドリ

マ-ワ



朝倉書店

需要全本请访问 www.ertongbook.com

絶滅危惧動物百科 10　　定価はカバーに表示

2008年9月15日　初版第1刷

監　訳　(財)自然環境研究センター
発行者　朝　倉　邦　造
発行所　株式会社　朝　倉　書　店
東京都新宿区新小川町6－29
郵便番号　162－8707
電　話　03(3260)0141
FAX　03(3260)0180
http://www.asakura.co.jp

〈検印省略〉

©2008〈無断複写・転載を禁ず〉

中央印刷・渡辺製本

ISBN 978-4-254-17690-2　C 3345　　Printed in Japan

Endangered Animals

絶滅危惧動物百科 10

［(財)自然環境研究センター 監訳］

マウンテンニアラ―ワタリアホウドリ



朝倉書店



ENDANGERED ANIMALS
by Amy-Jane Beer, Andrew Campbell, Robert and Valerie Davies, John Dawes, Jonathan Elphick, Tim Halliday, Pat Morris

Produced by Andromeda Oxford Limited
11–13 The Vineyard, Abingdon,
Oxon OX14 3PX, U.K.
www.andromeda.co.uk

Copyright © Andromeda Oxford Limited 2002

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the permission of the copyright holder.

Principal Contributors: *Amy-Jane Beer, Andrew Campbell, Robert and Valerie Davies, John Dawes, Jonathan Elphick, Tim Halliday, Pat Morris. Further contributions by David Capper and John Woodward*

Project Director: *Graham Bateman*
Managing Editors: *Shaun Barrington, Jo Newson*
Editor: *Penelope Mathias*
Art Editor and Designer: *Steve McCurdy*
Cartographic Editor: *Tim Williams*
Editorial Assistant: *Marian Dreier*
Picture Manager: *Claire Turner*
Production: *Clive Sparling*
Indexers: *Indexing Specialists, Hove, East Sussex*

Japanese translation rights arranged with Andromeda Oxford Limited, Abingdon, Oxfordshire, England, and The Brown Reference Group Plc, London, England through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

訳 者 序

地球上に現在みられる野生生物の種数は，学名がついているものだけでも約150万種，未記載のものを含めると1000万種を超えるといわれますが，ある推定によれば，このままでは21世紀中にその約半数が地球上から姿を消すと考えられています（たとえばエドワード・O・ウィルソン『生命の未来』，角川書店，2003参照）．このように大規模な絶滅現象は，およそ6500万年前に恐竜をはじめとする多くの生物種が絶滅して以来のもので，その主な原因は人口の増加や人間による資源利用量の増大，それにともなって起きているさまざまな形の環境変化です．ただし，生息状況についてある程度の情報があり，絶滅のおそれの高さが評価されている生物種は，体が比較的大きくて目立つものなど，全体のごく一部にすぎません．それでも，国際自然保護連合（IUCN）による2006年版のレッドリスト（絶滅危惧種のリスト）には，約1万6000種もの動植物が掲載されています．

本書『絶滅危惧動物百科』は，2002年にイギリスで出版された“Endangered Animals”という百科図鑑を翻訳したものです．本書は，過去に絶滅したか，現在，絶滅のおそれがある，あるいは何か保全上の問題を抱えている野生動物のうちの代表的・典型的な種を，哺乳類と鳥類を中心に，さらに他の脊椎動物，無脊椎動物も広く取り上げて，形態や分布，個体数，生態などの基本情報とともに，現在，その種がどのような状況におかれているか，絶滅のおそれを高めている原因は何か，絶滅を回避するためにどのような対策がとられているかなどについて，写真やイラストを添えて解説しています．

このようなテーマの本に避けがたい問題として，現在の状況を詳しく正確に記述しようとすればするほど，内容がすぐに古くなるということがあります．たとえば，本書の第1巻に解説がある絶滅危惧度合いの評価基準は，IUCNによって1994年に採用されたもので，その後，2001年に一部が改定された最新版ではありません．IUCNによる絶滅危惧度合いの評価結果やワシントン条約（「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」，CITES）付属書への掲載状況が，本書の出版後に変わっている種もあります．

また，日本に生息していて私たちがよく知っている動物（たとえばクビワオオコウモリ，ニホンザル，ニホンヤマネなど）についての解説をみると，事実とは異なっていたり，やや古いデータに基づくと思われる記述も散見されます．同様に，他の種についても若干の誤りが含まれている可能性があります．本書の原著者らが，入手できる資料を駆使して，正確な情報を提供すべく最大限の努力を払っているであろうことはいうまでもありませんが，本書のようにさまざまな対象を扱う場合には，どうしてもこうしたことが起こりがちです．

さらに，野生生物をどのように保全すべきかについての意見には，書き手の個人的な価値観が色濃く反映されることにも注意しなければなりません．原著者たちは，さまざまな意見の間でできるだけバランスをとろうとしていると思われますが，たとえば野生動物利用のあり方やアフリカゾウ，ミンククジラ，タイマイに関する解説にみられるように，原著者たちがイギリス人であることから，欧米中心の考え方に沿った記述がされているところもあります．ワシントン条約や国際捕鯨取締条約に基づく決定など，当面の国際的な合意にしても，政治的・経済的な力も作用した結果であって，すべてが科学的にみて妥当である保証はないことも忘れてはいけません．

この翻訳では，本書が出版された後の変化や不適当と思われる箇所などについても，とくに修正することはせずに，いくつかの明らかな誤りを除いて，基本的には原文どおりにしてあります．訳者みずからが最新情報を探し出し，典拠にあたり，さらに原著者と協議するのはきわめて困難ですし，中途半端な改訂は加えずに原文のままとした方が，後述するように，むしろ本書の利用価値を高めると考えたからです．

本書は，以上のような留意点はありますが，日本にはあまり類書がないだけに，絶滅のおそれのある動物たちの現状について，世界中を見渡した幅広い知識を得たり，

需要全本请访问 www.ertongbook.com

どのように絶滅危惧種の保全を進めるべきかを考える上で，よい参考書であるのは間違いありません．なかでも第1巻の総説には，野生動物の保全に関わる基礎的な知識がうまくまとめられています．ただし，どのようなテーマでも，きちんと調べようとすれば，1つの本ですべてが事足りるようなことはなく，本書についてもそれがいえるのはすでに述べたとおりです．

それから，日本が主要な生息地ではない種の解説にも，日本がしばしば登場することに気づいてほしいと思います．それは，たとえばウバザメ，クロマグロ，タイマイ，スッポンモドキなどです．事実とは違うと思われる記述もいくらかはありますが，このことは日本が，他の先進諸国と同様に，世界中の野生動物をペット，食品，装飾品，日用品などとして大量に消費することを通じて，それらの生息状況にいかに大きな影響を及ぼしているかということ，また逆に自分たちの行動が事態を改善する大きな力にもなりうることを示しています．

読者は，本書を手がかりに，疑問に思う点についてはとくに，他の本を参照したり，最新データにあたるなどして，正確な，また詳しい情報を得る努力をしてください．本書にある記述をそのまま受け入れるのでなく，異なる情報や意見に接し，それらの違いが生じた理由について考えることは，問題をより深く理解するのに役立つでしょう．そして，絶滅危惧種を含む野生生物の保全のあり方についてみずから考え，実行に移してほしいと思います．本書がそのような作業の出発点として大いに利用されることを期待します．

2008年3月

訳者を代表して
石　井　信　夫

訳者一覧

監　訳

（財）自然環境研究センター

分類群別担当者

石井信夫	東京女子大学文理学部	［第1巻（総説）・陸生哺乳類］
石塚　新	（財）自然環境研究センター	［無脊椎動物・昆虫類］
今井　仁	（財）自然環境研究センター	［魚類］
斉藤明子	千葉県立中央博物館	［昆虫類］
富田京一	肉食爬虫類研究所	［爬虫類・両生類］
中山聖子	（財）自然環境研究センター	［甲殻類］
奴賀俊光	千葉大学海洋バイオシステム研究センター	［鳥類］
箕輪義隆	（財）日本鳥類保護連盟調査室	［鳥類］
吉岡　基	三重大学大学院生物資源学研究科	［海生哺乳類］

訳　者

荒木良太	奥原　剛	中村康弘	広瀬珠子
石田スーザン	熊懐　愛	名取洋司	箕輪友紀子
打木研三	中島絵里	橋本幸彦	米田久美子

（五十音順）

目　　次

マウンテンニアラ 6
マウンテンブラックサイドデイス 8
マーコール 10
マスクトエンゼルフィッシュ 12
マツテン 14
マホガニーフクロモモンガ 16
マングローブフィンチ 18
ミズテンレック 20
【ミツスイ】カワリハシハワイミツスイ 22
【ミツスイ】キガオミツスイ 24
ミドリイトマキヒトデ 26
ミノールカメレオン 28
ミユビハリモグラ（ナガハシハリモグラ） 30
ムナジロクイナモドキ 32
メコンオオナマズ 34
モウコノウマ 36
モハーラカラコレラ 38
モーリシャスベニノジコ 40
ヤク 42
ヤブイヌ 44
ヤマアノア 46
【ヤマネ】ニホンヤマネ 48
【ヤマネ】メガネヤマネ 50
【ヤマネ】ヨーロッパヤマネ 52
ヨーロッパエゾアカヤマアリ 54
ヨーロッパオオウニ 56
ヨーロッパハタリス 58
ヨーロッパビーバー 60
ヨーロッパミヤマカミキリ 62
ヨーロッパミンク 64
ラザコヒバリ 66
ラッコ 68
リカオン 70
レイクワナムレインボーフィッシュ 72
レイザーバックサッカー 74
レッサースパイニーイール 76
レッドニードタランチュラ 78
ロシアデスマン 80
ロドリゲスヒモムシ 82
【ロバ】アジアノロバ 84
【ロバ】アフリカノロバ 86
【ワシ】イベリアカタシロワシ 88
【ワシ】オウギワシ 90
【ワシ】オオワシ 92
【ワシ】フィリピンワシ 94
ワタリアホウドリ 96
用語解説 98
参考文献/ウェブサイト 101
謝辞と写真提供 102
分類群ごとの動物名リスト 103
学名・和名索引 105

この図鑑セットについて

『絶滅危惧動物百科』は，世界中の動物に及んでいる脅威を取り上げて解説する全10巻の図鑑セットです．主な脅威の1つは生息地の消失ですが，それだけではなく，本来生息しない地域へ移入された種の影響がとくに深刻です．

さまざまな問題に直面する動物たちの実例を，哺乳類や鳥類のほか，魚類，爬虫類，両生類，昆虫・無脊椎動物まで，主な動物分類群がすべて含まれるように選びました．生息数がきわめて多いにもかかわらず，問題に直面している動物がいます．また，すでに絶滅した動物もいます．

第1巻『総説―絶滅危惧動物とは』は，科学者が動物を分類する方法や，動物たちが絶滅の危機に瀕している理由，保全活動家の仕事などについて解説しています．文中の相互索引には，巻数の次にページ数が記され，この図鑑セットの中の関連箇所を示しています．

第2巻から第10巻は，それぞれの種についての解説です．登場する動物たちは，和名でアイウエオ順に，それぞれ見開き2ページで紹介されています．データパネルには基本情報と生息分布図がまとめられています．

各巻の目次にアイウエオ順で並んだ動物の和名から，特定の種を探してください（各巻末尾の全巻共通索引には，学名と和名のページがあります）．知りたい動物がみつかったら，まずデータパネルから関連する種をたどることもできます．「＊」マークがついた「近縁の絶滅危惧種」は別に解説されています．また，左ページ下にある関連ページの相互索引は，第1巻，あるいは他の巻の項目を指しています．たとえば，「コキンチョウ **5**：66」は，第5巻の66ページから見開きでコキンチョウの解説があることを示しています．この相互索引には，ふつう，いま読んでいる種と同じ属や科に含まれる動物が出ていますが，分布域や脅威の種類が同じ動物が記されている場合もあります．

各巻の末尾には，用語解説，参考になる文献やウェブサイト，全巻索引があります．



マウンテンニアラ

Tragelaphus buxtoni

Mountain nyala

マウンテンニアラは20世紀初頭まで知られていなかった，エチオピア南東部のバレ山地にのみ生息するアフリカのレイヨウの1種です．現在の生息数はおよそ2000頭です．

エチオピアは，19世紀にアフリカでヨーロッパの植民地とならなかった地域の1つです．その理由は，山が多く植民地の拡張の余地がほとんどなかったためです．その結果，とくに道がなく，ほとんど人がいなかった高山地帯では，多くの種が発見から逃れました．マウンテンニアラはアフリカで最後に発見された大型哺乳類の1種で，1908年まで科学者たちに知られていませんでした．

ニアラはアフリカ南東部の森林に生息するレイヨウです．マウンテンニアラは，外見がニアラに似た，系統的にも近い動物で，以前はエチオピア南東部の高地全域に生息していました．しかし，現在では南部にあるバレ山脈の，標高3000m以上の地域にしかみられません．たいていは自然発生的な小群でくらし，山地から標高約4200mの高山荒地の縁までに生育する高木と低木を食べます．マウンテンニアラは，茂ったやぶになるオトギリソウの1種を好んで食べますが，ハゴロモグサやヤエムグラのような小さな草本もかじります．ニアラはふつう，夜明けと夕暮れどきに活動し，休むときは木の下で過ごします．あまり遠くまで出歩くことはなく，隣り合う2，3の谷に囲まれる地域で一生を過ごし，10km^{2}未満くらいのなわばりをもちます．成体のオスは，ときには単独で，もっと広い範囲を歩きまわることがあります．

適さない生息地

マウンテンニアラは，毎晩気温が氷点下まで下がる厳しい環境によく適応しています．しかし，この荒れ地では，彼らにとっても厳しすぎる時期があります．乾季の間，彼らは気温が高く，





データパネル

英名 Mountain nyala

学名 *Tragelaphus buxtoni*

科名 ウシ科 Bovidae

世界の個体数 3000頭以下

分布 エチオピア．バレ山地

生息場所 山地のヒース林と森林

大きさ 頭胴長：オス2.4～2.6m，メス1.9～2.0m，肩高：91～137cm，体重：150～300kg

形態 大きくてほっそりしたレイヨウで，たてがみをもち，のどの下に長い毛がある．オスはねじれた角をもち，90cm以上になることもある．オスは濃い茶色で，年を経るにつれて色が濃くなり，顔と横腹には白く目立つ模様がある．メスはオスより白っぽい

食物 さまざまな植物．主に灌木であるが，ときに草本や地衣類も食べる．乾季には樹木の枯葉を食べる

繁殖 交尾期は主として12月．8～9カ月の妊娠期間の後，雨季のおわりに1頭を出産する．寿命は知られていないが，10年以上生きるらしい

近縁の絶滅危惧種 クーズー（*Tragelaphus strepsiceros*）*：低リスク・保全対策依存（LRcd）

現状 IUCN絶滅危惧（EN），CITES付属書非掲載

参照項目：「牧草地」**1:** 40，エチオピアオオカミ **3:** 26，クーズー **5:** 14

食べ物が豊富な標高の低い場所に移動しなければなりません．

最近マウンテンニアラは，家畜のヒツジやヤギ，ウシのために土地全体を飼料に向いた牧草に変える土地改良のあおりを受けています．人口増加はニアラの生息するほとんどの森を圧迫しました．木々は薪（たきぎ）にするため伐り倒され，いまでは多くの場所が飼料にするイネ科の草本がよく育つように繰り返し燃やされています．イネ科草本だけではニアラの十分な食べ物にはならないため，ニアラは多くの生息地から追い出され，現在では，農業に向かない山地のより高い場所にのみ生息しています．

以前は，ニアラは現地の人々や，ときには大物ハンターにも狩られていました．しかし現在では，この動物は法律によって保護されており，後者はもはや問題ではありません．

1960年代には8000頭あまりのマウンテンニアラが生息すると考えられていましたが，最新（1996年）の推定では2000頭しか残っていません．生き残った個体群の少なくとも半数がバレ山脈国立公園内に生息しており，ここはわりと安全です．飼育下のマウンテンニアラはいません．



マウンテンニアラは，アフリカ南東部にみられるニアラよりも大型です．灰色がかった茶色で，白い斑点が頭と首，体にあります．

マウンテンブラックサイドデイス

Phoxinus cumberlandensis

Mountain blackside dace

マウンテンブラックサイドデイスの生息地は，ケンタッキー州とテネシー州北東部のカンバーランド川にある2，3の小川に限定されています．そして，この魚はいくつかの地域で危機に瀕しています．伐木搬出，採掘，道路の建設などによる生息環境の変化は，他の種との競合や個体群の減少を招いています．

マウンテンブラックサイドデイスの最初の標本は，1975年にダニエルブーンナショナルフォレスト内で採集されました．その標本は，まだ本種の個体群調査が行われていなかった小規模な地域から採集された標本であったにもかかわらず，他のヒメハヤ属の種と同じ体色をしていたことから，ほとんど気にとめられることはありませんでした．マウンテンブラックサイドデイスとその近縁種との違いが完全に認識されるようになるまで，さらに3年かかりました．それ以来，本種について多くの研究がなされてきました．

データパネル

英名 Mountain blackside dace

学名 *Phoxinus cumberlandensis*

科名 コイ科 Cyprinidae

世界の個体数 不明

分布 ケンタッキー州南東部とテネシー州北東部にかかる，カンバーランド川流域の小川の瀬に生息する

生息場所 冷水が流れている小川の，上流域にある沈泥のないよどみ．砂，砂利，小石，岩の底質を好む．えぐれのある川岸，とくに植物が覆いかぶさり隠れ家となるところ

大きさ 体長：2～7cm

形態 体形は細く，吻はとがり，ひれは短くがっしりしている．吻部から目を通り体に沿って尾柄部（尾のつけ根）まで黒帯が走る．とくに繁殖期の成魚のオスにおいては，下あご，のど，頸，体の腹側全体が赤い．背びれの基底部も赤い．その他のひれはすすけた金色あるいは黄色．体の上半分はオリーブゴールド

食物 主に藻類，デトリタス（有機残渣），小型水生無脊椎動物

繁殖 オスは4～6月に沈泥のない営巣場所に集まり，1匹のメスがやってくるのを待ち受ける．メスがくると，オスのグループがメスのまわりに群がり，メスとともに生殖行動を開始する．ほとんど知られていないが，幼魚は1年で成熟すると考えられている．寿命は3～4年

近縁の絶滅危惧種 テネシーデイス（*Phoxinus tennesseensis*）：低リスク・準絶滅危惧（LRnt）

現状 IUCN危急（VU），CITES付属書非掲載



沈泥回避性

マウンテンブラックサイドデイスに関してとくに興味深いことは，沈泥が堆積する場所を回避する性質で，それゆえ本種の生息環境はより狭く浅い細流が注ぎ込む清澄な小河川（とくに水深約100cmのよどみ）に限定されているのです．そのようなよどみには川岸のえぐれや密な植生がつきものです．そして川底は砂質か砂利，あるいは岩質で，微粒子の沈泥はありません．ほとんどのよどみは海抜275～490mのところにあります．

マウンテンブラックサイドデイスは，ヒメハヤ属に含まれる他の数種と同様な体色を呈します．とくに本属のオスは，繁殖期にあでやかな色で求愛行動をします．

短い流程における分布

いまでは証拠がありませんが，かつてマウンテンブラックサイドデイスは，カンバーランド川水系の50を優に超える他の河川に生息していた可能性があります．現在は，同水系の上流域にある約30の河川にのみ個体群の存在が知られています．さらに，そのうちの27の個体群の分布は約1.5km，あるいはそれ以下の短い流程に限定されていることがわかっています．そのいくつかでは実際に，わずか数百mの範囲にだけみられるにすぎません．マウンテンブラックサイドデイスは，著しい危機にさらされていると考えなければなりません．なぜなら，本種が生息するすべての河川は比較的狭い範囲に集中しているので，同一の要因によりそれらの環境が変わってしまう可能性があるからです．

マウンテンブラックサイドデイス以外の

参照項目：「汚染」**1:** 52，イカンテモレ **2:** 48，シルバーシャーク **6:** 66，バードダニオ **8:** 74，レイザーバックサッカー **10:** 74

魚種は，これらの水域にはほとんど認められません．しかしながら，時折みられるのはサザンレッドベリーデイスです．これら両種の個体群間には，川の水流により優勢・劣勢が決定される興味深い関係が存在します．水流が比較的速く，その結果水が清澄で，沈殿物がないところではマウンテンブラックサイドデイスの方がサザンレッドベリーデイスよりも多数みられる傾向があります．しかし，たとえば川の勾配が変化したことにより水流が減少したところでは，サザンレッドベリーデイスが優勢となり，時には，ある期間は完全にマウンテンブラックサイドデイスにとって代わることもあります．

このダイナミックな関係は，マウンテンブラックサイドデイスが独立した種として認識されてからまもなく認知されました．このことは，流れが遅いという条件を有利に利用することができる競合相手により，本種が深刻な危機にさらされている可能性についての明確な早期の警告となりました．

減少と回復

マウンテンブラックサイドデイスが直面している主な問題は，周辺環境がレッドベリーデイスの好む条件へと変化していることで，これには水温の上昇も含まれます．変化した生息環境においては，水中に浮遊するシルト（砂と粘土との中間の細かさを有する土）量は明らかに増加しています．その結果として，サザンレッドベリーデイスはブラントノーズミノーなどを含む他の種とともに，マウンテンブラックサイドデイスのかたわらに生息の糸口をみつけるばかりでなく，餌をめぐる競合も引き起こしてしまいます．

さらなる脅威は，その地域の石炭採掘です．とくに露天掘りは多量の沈泥をもたらし，それと同時に酸性の雨水流出が起こり，これら両方の要因が複合的に作用して，流域河川のマウンテンブラックサイドデイスの個体群を減少させました．近代的な石炭採掘技術が同じ影響を与えるかどうかは，いまのところ明らかではありません．

マウンテンブラックサイドデイスの分布域内における，伐木や道路建設などの環境を変化させる開発事業は，本種の個体群全体にまでも悪影響を及ぼしてきたのです（そしていまも及ぼし続けています）．

1980年代中頃に行われた研究によると，これらすべての複合要因によって，既知の30カ所の生息地域のうち，健全な個体群が認められるのはわずか9カ所となってしまったことがわかりました．

ここ数年の間にそれらの場所でどの程度，本種の個体群が回復したか，あるいは減少したかはわかりません．本種が本来の生息域で生き残っていくために重要なことは，個体群に対する影響の大きい環境の変化や劣化をもたらす要因を適切に監視制限していくことであるというのは間違いありません．



マウンテンブラックサイドデイスは，その近縁種などと同様に赤色，黒色，白色，銀色，黒ずんだ金色といった体色を呈します．

需要全本请访问 www.ertongbook.com

マーコール

Capra falconeri
Markhor

堂々とした姿のマーコールはかつてヒマラヤの小さな丘にふつうにみられましたが，肉とみごとな角を目的とした数世紀に及ぶ狩猟の結果，野生では希少になりました．

マーコールは世界最大のヤギです．残念なことに，めったに観察できない動物で，もっとも希少な種でもあります．わずか50年前，ヒマラヤ西部の斜面下部にある雑木林では100頭を超える群れが比較的ふつうにみられました．しかし今日では，もっとも大きな群れでも30頭以上になることはめったになく，平均的な群れの頭数はたったの9頭です．

群れは季節に応じて山をのぼり降りし，真夏には標高3940mにまで達しますが，冬は厳しい気候を避けて標高610～910mまでくだります．もっとも大きな群れは，メスと子たちで構成されます．若いマーコールは母親のもとに2歳半までとどまるようです．若い個体にとって危険は多く，生まれて18カ月の間に50%がいなくなり，死亡すると推測されています．

冬の繁殖毛をまとったオスの成獣はみごとな動物です．首のまわりと胸には長いたてがみがあり，脚にはゆったりと垂れたズボンのように長い毛が生えています．メスにも，オスほどではありませんが，毛のふさ飾りがあります．しかし，夏にはオスもメスも短くてつやのある毛皮に戻ります．

角の問題

マーコールのもっとも目立つ特徴は，間違いなく雌雄ともにある華麗な角です．雄ジカの枝角（えだつの）とは違い，ヤギやウシの角は繁殖期がおわっても抜け落ちることはなく，生涯を通じて伸び続けます．そのために，巨大な2本の角は健康で長生きした個体であることを示す確実な証です．これまでに記録された最大の角は長さ1.6mもあり，成獣の体とほとんど同じ長さです．メスのマーコールの角はときに25cm以上の長さになります．

角は長寿と力強さの明確なシンボルですが，オスの角は見せかけだけはなく，非常に効果的な武器になります．ライバルのオスどうしは角を組み合わせ，押したりひねったりして相手のバランスをくずそうとします．たたかいは命がけの真剣勝負にみえますが，死に至る本当のたたかいというよりも，力比べの勝負といった感じです．ふつう，勝ったオスは次にまたたたかう機会を得ます．

しかし残念なことに，繁殖相手を得るという成功に特定のオスを導くまさにその角が，マーコールにとって破滅の原因となる可能性も大きいのです．完全に違法ですが，マーコールの角の取引はかなりのお金になります．角の粉末は多くの伝統的な薬に使われますし，台にすえられた2本の角は価値ある狩猟トロフィーになります．中国ではマーコールの角は1ポンド（約0.45kg）当たり2000ドル以上になります．貧しい地元の人々が，マーコールを，自分が飼っているヤギの大型で高値の変種と考え，ブラックマーケットに喜んで提供するのは驚くことではありません．

生息環境をめぐる争い

マーコールはまた，かなりの高率でオオカミやユキヒョウ，オオヤマネコに捕食されます．加えて，マーコールの生息地に居住する人々の着実な侵出と，限られた牧草をめぐる家畜との争いが，生存を難しくしています．

マーコールは3つの亜種に分けられ，そのすべてに絶滅のおそれがあり，そのうちの1つのトルクメンマーコールはIUCNレッドリストでは「絶滅寸前（CR）」です．生息地消失の脅威と違法な狩猟をなくしたとしても，マーコールの存続は困難です．この動物の食べ物は比較的栄養が乏しく，餌がイネ科草本の1種（*Poa flabellate*）から小枝や木の葉に変わる冬場はとくにそうです．生き残れるよう十分に食べるため，マーコールはふつう，1

参照項目：「特殊化」**1:** 30，「贅沢品」**1:** 48，ヌビアアイベックス **8:** 14



データパネル

英名　Markhor

学名　*Capra falconeri*

科名　ウシ科　Bovidae

世界の個体数　おそらく6000頭以下

分布　アフガニスタン，パキスタン，インド，タジキスタン，ウズベキスタン，トルクメニスタンのヒマラヤ地方

生息場所　山の斜面の低木密生林

大きさ　頭胴長：1.9m，肩高：1.2m．メスはオスより小さい．体重：110kg

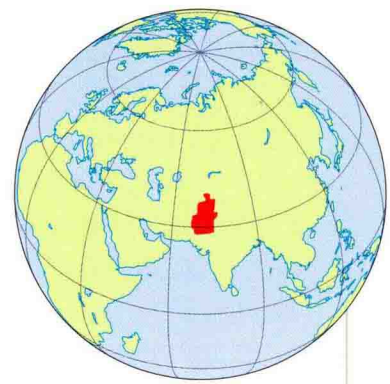
形態　大きくて，白っぽい茶色の毛をもつ毛深いヒツジ．コルク抜きのような，特徴的な角をもつ

食物　草本，樹木の葉，小枝，木の実（どんぐりのような堅果）

繁殖　4～6月に，1～3頭を出産する．寿命は少なくとも15年

近縁の絶滅危惧種　ヌビアアイベックス（*Capra nubiana*）*：絶滅危惧（EN），ワリアアイベックス（*C. walie*）：絶滅寸前（CR），その他の多くの野生ヤギ

現状　IUCN絶滅危惧（EN），CITES付属書Ⅰ



日に8～12時間を食事に費やし，昼間に休息と反芻（はんすう）のため短い休息をとります．このような生活習慣が，硬い食べ物のもっとも効率的な消化を保証しています．

マーコールの名前は，ペルシア語でヘビを食べる者を意味します．ヤギは植食性ですが，身を守るときにはヘビを殺すでしょう．おそらくこうした行動から名前がついたと思われます．

マスクトエンゼルフィッシュ

Genicanthus personatus
Masked angelfish

とても美しく珍しいマスクトエンゼルフィッシュは，ハワイ諸島でみられます．本種のオスは体色がメスと非常に異なるので，別種と考えられていました．そして，興味深いことにメスは性転換をします．この魚がどれほど珍しいかは知られていませんが，多数の個体が目撃されたことはこれまでありません．

1970年代初期に水族館のダイバーによって，以前は知られていなかった4個体の小さいエンゼルフィッシュがハワイとオアフ沖で採集されました．その4個体はすべてメスでした．それらはアイボリーないし白色の体をもち，ひれはおおむね白色でした．尾びれの半分は白で残りは黒く，頭部には黒い「マスク」をつけていました．そして，その種はマスクトエンゼルフィッシュと名づけられました．

本種が新種として記載されたときに，魚類学者のジョン・ランドールは，やがて本種のオスはみつかるだろうが，それらはメスと非常に相違することがわかるだろうと予言しました．その2年後の1975年に，調査船の引網が2個体のオスをとらえたときに，彼の予言が正しかったことが証明されました．その成熟オスはメスと同様の白い体（やや灰色がかっている）と尾びれの黒帯を保持していました．しかし，頭部のマスク部分は黒色ではなく，残る各ひれとともに鮮烈な黄金色を呈していました．事実，オスの体色はあまりにもメスとはかけ離れていたので，本種はこれまでジェニカンサス属の新種として記載されてきたのです．

エンゼルフィッシュ類とバタフライフィッシュ類

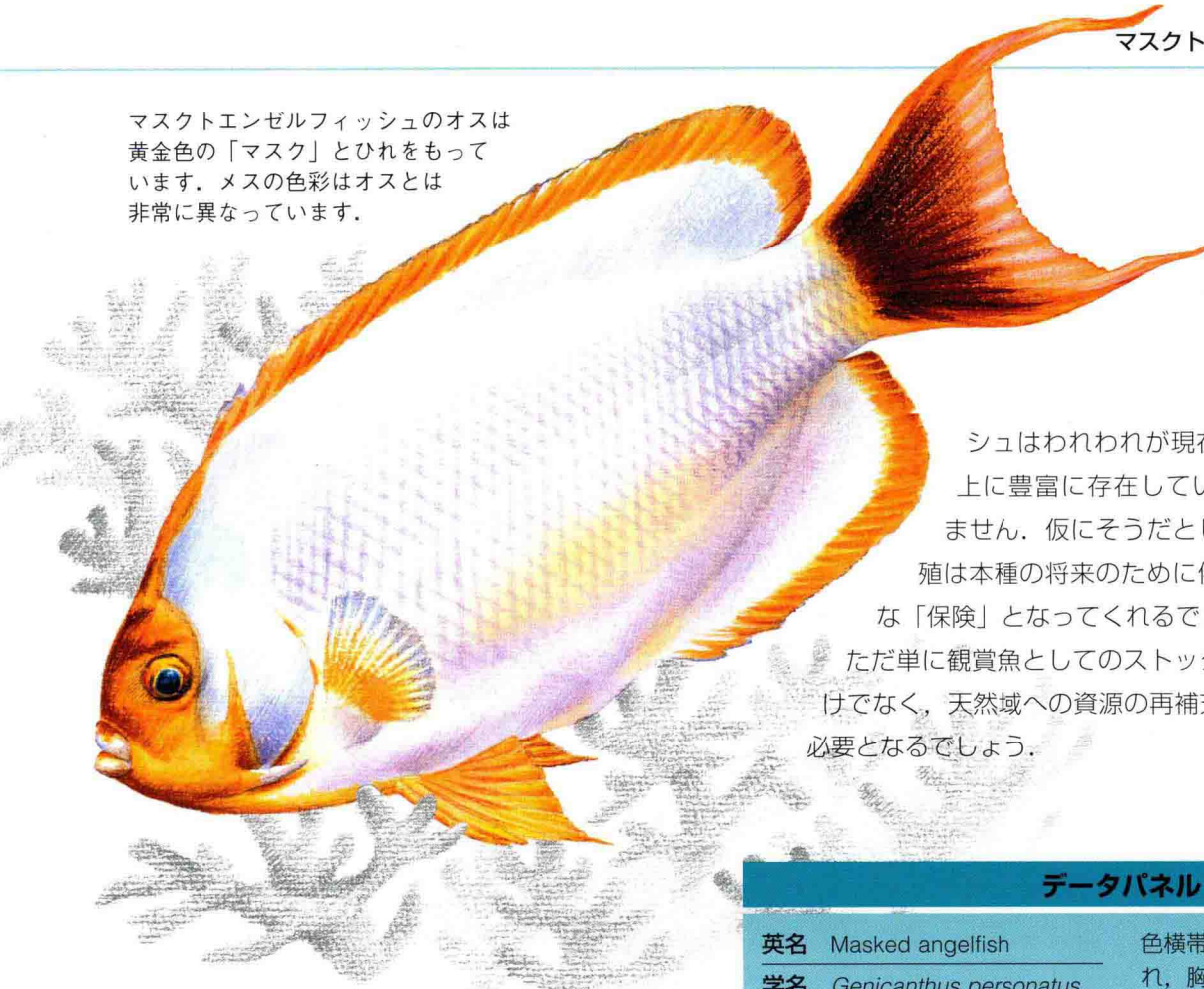
1970年代中頃まで，エンゼルフィッシュ類とバタフライフィッシュ類は同一の科に含められていましたが，これらを2グループに分割できるいくつかの形質があります．とくに，エンゼルフィッシュ類は前鰓蓋骨（えらぶたのいちばん前の骨）に後方を向いてとがっている強い1棘をもっています．バタフライフィッシュ類の前鰓蓋骨の縁辺は滑らかな鋸歯状で，強い1棘をもちません．そのとげを欠くことと他の骨格的相違は，やがてそれぞれのグループを異なる分類群として認めるに足る相違であると考えられるようになり，エンゼルフィッシュ類にはキンチャクダイ科，バタフライフィッシュ類にはチョウチョウウオ科という科名が与えられました．

長い間，エンゼルフィッシュ類の生殖生態についてはほとんど知られていませんでしたが，1978年のレンテンヤッコを用いた研究によりもっとも興味深い特徴が明らかとされました．それは，性の転換は起こりますが，ただし1方向にのみであるということです．通常レンテンヤッコは1個体の有力なオスと数個体のメスからなる集団，またはハーレムとして認められます．しかしながら，たとえばもしオスが食べられていなくなると，集団内で上位にあるメス（ふつうは最大のもの）に2，3週間かけて徐々に性の転換が起こり，完全にオスの機能をもつようになります．他のエンゼルフィッシュに関して同様の報告がなされた後まもなく，性転換（メスからオスという方向だけでその逆はない）はかなり広く認められる現象であることが明白になりました．いままでのところ，すべてのキンチャクダイ科魚類がこの能力をもっているかどうかは知られていませんが，マスクトエンゼルフィッシュはたしかにもっています．

水槽内のエンゼルフィッシュ類

これまでは，不可能ではないにしろ，ほとんどすべてのエンゼルフィッシュ類を水槽内で飼うことは難しいといわれてきました．しかしそうした状況は，1980年代おわりから1990年代初頭にかけて，多くの種類について改善されました．飼育機材と飼育管理技術の進歩とともに，エンゼルフィッシュ類の生物学的研究の進歩は，かつて飼育が難しいとされていた数種を多数の観賞魚愛好家にとって手の届きやすいものとしました．マスクトエンゼルフィッシュは依然として飼育の難しい種ではありますが，それでも経験豊富な海水魚の観賞魚愛好家たちによって上手に飼育されるようになりました．

参照項目：「種分化」**1:** 28，「飼育繁殖」**1:** 89，スプリングピグミーサンフィッシュ **6:** 86，ドワーフピグミーゴビー **7:** 88



マスクトエンゼルフィッシュのオスは黄金色の「マスク」とひれをもっています．メスの色彩はオスとは非常に異なっています．

シュはわれわれが現在考えている以上に豊富に存在しているのかもしれません．仮にそうだとしても，人工繁殖は本種の将来のために依然として重要な「保険」となってくれるでしょう．それはただ単に観賞魚としてのストックを提供するだけでなく，天然域への資源の再補充としていずれ必要となるでしょう．

本種の人工繁殖には，同時にさまざまな困難がともない完全に克服されていません．サザナミヤッコ属に属するいくつかの大型種における繁殖の成功は報告されてきています．しかし，マスクトエンゼルフィッシュの人工繁殖が成功するためには，さらなる飼育技術の進歩が必要であり，とくに本種の孵化仔魚に適した餌の技術開発が重要です．

保険証書

マスクトエンゼルフィッシュは，ハワイ諸島の主要な島々の周辺海域の水深60m付近に生息している，とても珍しい魚として知られています．たとえばキューレ環礁やミッドウェイ環礁周辺では，もっと浅いところで観察されていますが，その個体数は決して多くはありません．本種がスキューバダイバーの潜水深度の限界を超える75m以深にたくさん生息しているかどうかはわかっていません．時折ダイバーによって採集される標本は，たまたま本種の本来の生息深度の上限にすんでいたものにすぎないかもしれないのです．もしそうであるなら，マスクトエンゼルフィッ



データパネル

英名 Masked angelfish

学名 *Genicanthus personatus*

科名 キンチャクダイ科 Pomacanthidae

世界の個体数 不明

分布 ハワイ諸島北西部の島々

生息場所 約18m以深（水深84mから1個体の採集記録がある）．しばしば外洋に面した礁斜面付近でみられる

大きさ オスは25cmに達するという報告がある．おそらくメスはやや小さい

形態 オスの体色は灰白色．頭部の「フェイスマスク（仮面様の着色）」，背びれ，胸びれ，腹びれ，尻びれは黄色から黄金色．尾びれの前方部には黒色横帯があり，後縁は白色．尾びれの最上および最下鰭条の先端は糸状に伸びている．メスでは，尾びれ鰭条の伸長はないが，黒色横帯はある．メスの体色や背びれ，胸びれ，尻びれの色は体と同様のアイボリーホワイト．腹びれは前半分が白色，後半分は橙黄色．「フェイスマスク」は黒色

食物 主に動物プランクトン（微小な動物）

繁殖 メスが性転換をする能力があることは知られているが，詳細は不明．別種のエンゼルフィッシュの繁殖は5～10月で，夏季の数カ月は終始産卵する．産卵方法は，まずオスが底から水面に向かって浮上し，メスはそれを追い，精子と卵は同時に放出されるというものである．両親による卵保護はない．受精卵は水面へと浮上し，18～30時間後に孵化して浮遊性の仔魚となる

近縁の絶滅危惧種 レスプレンデンスピグミーエンゼルフィッシュ（*Centropyge resplendens*）：危急（VU）

現状 IUCN，CITES付属書とも非掲載

マツテン

Martes martes

Pine marten

19世紀に，猟区管理人による間引きはマツテンを分布域内の多くの場所から消滅させました．今日ではこの動物はもっと広く生息し，数も増加しています．

マツテンはネコほどの大きさのイタチ科の仲間です．その形や大きさは分布域の中でかなり多様です．もっとも大型の個体はデンマークとヨーロッパ西部に，最小のものは極東にみられます．

マツテンは主に夜に活動し，寝たり，避難したり，子を育てるのに木の洞や岩間の空洞を好んで使います．森林生の動物で，木にのぼり，樹幹を跳びまわるのによく適応しており，ふつうは針葉樹林から森林限界までにみられます．しかし開けた草原での採食も好み，そこでネズミや地上営巣する鳥類をつかまえます．アイルランドとスイスでは秋に熟した果実もかなり食べます．

マツテンはリスも捕食すると広く信じられています．たまにリスの子を食べることはありますが，枝上ではリスの成体ほど機敏ではなく，したがってふつうは構わずにいます．マツテンは蜂蜜をねらってハチの巣を襲うこともあり，ウサギやレミングを，とくに大量にいるときは食べることもあります．

簡単につかまる

マツテンは柔軟性や適応性が高く，繁栄した動物ですが，多くの地域，とくに少なくとも19世紀末までは広く分布していたイギリス南部で絶滅しました．しかし私有地での狩猟鳥射撃ブームが，多数の猟区管理人の雇用につながりました．狩猟鳥を殺すと思われるすべての捕食動物を根絶することが仕事で，簡単につかまり，毒餌にひきつけられるマツテンはとくに被害を受けました．マツテンは20世紀の後半になっても数個体がばらばらに生きていたかもしれませんが，イングランドのほとんどの州やウェールズから徐々に消えていきました．

法的な保護や猟区管理人が少なくなったことで，マツテンはスコットランドの何地域かに再定着し，イングランド北部にもまた定着するかもしれません．回復は木材生産のための大規模な針葉樹植林によって助けられました．マツテンにとってこうした森林は，好適な生息環境を提供しただけでなく，成長の初期段階に好物の膨大な数のネズミを養いました．

データパネル

英名 Pine marten

学名 *Martes martes*

科名 イタチ科 Mustelidae

世界の個体数 約20万頭以上

分布 ヨーロッパのほとんど．スペインからシベリア西部，しかし多くの地域で希少

生息場所 温帯のマツ林から森林限界まで．樹洞や岩の割れ目につくる穴

大きさ 頭胴長：36～56cm，尾長：17～28cm，肩高：15cm．メスはオスよりも少なくとも10～12%小さい．体重：0.5～2.2kg

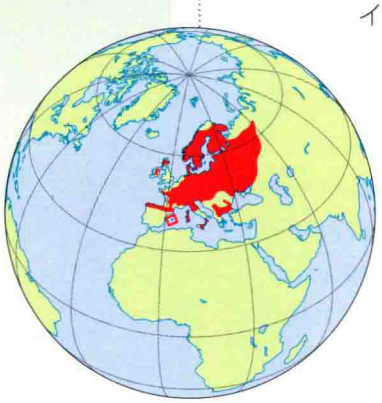
形態 長くほっそりした，ネコくらいの大きさの動物，毛皮はチョコレート色，尾はふさふさしており，のどに乳オレンジ色のパッチがある

食物 小型哺乳類，とくにネズミ．それ以外にも鳥類，昆虫，海岸沿いの動物まで．ときに熟果も食べる

繁殖 1年に1回，ふつう3頭（6頭まで）の子が生まれる．14カ月で性成熟．寿命は10～15年，飼育下では最大18年

近縁の絶滅危惧種 ヨーロッパミンク（*Mustela lutreola*）*：絶滅危惧（EN），さまざまなカワウソと他のイタチ類

現状 IUCN，CITES付属書とも非掲載



参照項目：「再導入」**1:** 94，カワウソ **4:** 52，クロアシイタチ **5:** 34，ヨーロッパミンク **10:** 64



態度の変化

現在では猟区管理人はマツテンの習性をよく知るようになり，寛容になりました．ヨーロッパ大陸の猟区管理人はその動物の駆逐にそれほど熱心ではなかったので，より多くが残っています．今日の差しせまった脅威は，交通量の多い道路やワシミミズクによる捕食です．ニワトリを守るために毒殺したり，ワナをかける農家もいます．

20世紀初期に，マツテンの個体数は毛皮産業によってかなり減少しました．この動物の毛皮は珍重され，数千頭のマツテンが需要を満たすために殺されました．いくつかの地域では商業目的の捕獲が続いていますが，ロシアではもっとマツテンがいて，毛皮が非常に流行した1920年代以来，捕獲数は80％減少しました．

マツテンは樹上性のイタチ科の1種です．マツテンは，毛皮目当ての狩猟の対象になっていました．また，狩猟鳥の捕食動物を根絶する目的で，猟区管理人によって殺されてもいました．

需要全本请访问 www.ertongbook.com